「OpenOffice」
Microsoft Office 互換ソフト
無料というだけじゃない魅力とは

マイクロソフトのオフィスソフトの次期バージョンMicrosoft Office 2010 の話題を耳にするようになってきました。ところが、2010 はおろか、現行製品である 2007 さえ採用していない企業が少なくありません。「費用がかかる、操作性が大幅に異なる……」という理由が多いようです。
そこで注目されているのが「OpenOffice.org」。一般には「OpenOffice」と呼ばれている、Microsoft Office の互換ソフトです。最大のメリットは無料で利用できることです。さらに、国際的な文書標準に対応、従来の Office の操作性を維持し、多くのユーザーの支持を集めています。この OpenOffice.org の魅力や生い立ち、気になる互換性を確認します。

【図1】オープニング画面

【図2】ようこそ画面

■ OpenOffice.orgとは

OpenOffice.org（オープンオフィス・ドット・オルグ）とは、文字どおりオープンソースのオフィスソフト。オープンソースであることから、無料で公開され、誰でも自由に利用することができます。本人に技術と興味があれば、開発に参加することもできます。

ワープロソフト「Writer」、表計算ソフト「Calc」、プレゼンテーションソフト「Impress」、図形描画「Draw」などで構成されており、Microsoft Office との対応は表 1 のようになっています。

表 1　OpenOffice.org のアプリケーション

機能	名前	Microsoft Office との対応
ワープロ	OpenOffice Writer	Microsoft Word
表計算	OpenOffice Calc	Microsoft Excel
プレゼンテーション	OpenOffice Impress	Microsoft PowerPoint
ドローツール	OpenOffice Draw	図形描画機能 Microsoft Draw（注）
ホームページ作成	OpenOffice HTML Editor	Microsoft FrontPage Express
数式エディタ	OpenOffice Math Editor	数式エディタ

注 ： 現在の Microsoft Office には Microsoft Draw はラインアップされておらず、図形描画機能として、Word や Excel に組み込まれています。

もともと OpenOffice.org は、1980 年代にドイツの StarDivision 社で開発された統合アプリケーションでした。これをサン・マイクロシステムズが買収し、StarOffice（日本語版は StarSuite）として発売。さらに、このプログラムソースを 2000 年 6 月に公開して、OpenOffice.org となっています。2009 年 11 月現在の最新のバージョンは 3.1.1 です。

■ OpenOffice.orgの魅力

それでは、なぜ OpenOffice.org に多くの企業が注目しているのでしょうか。それには以下の理由があります。

●コスト削減

最大の魅力は無料であること。世界同時不況の出口が見えずコスト削減が最優先されている今、多数の Microsoft Office ライセンスを抱える企業にとってライセンス契約料は無視できない経費となっています。

ちなみに企業向けの Microsoft Office は同梱されるソフトの種類によって Office Standard 2007、Office Professional Plus 2007、Office Enterprise 2007 という 3 つのエディションがあります。1 本あたり約 45,000 円から 70,000 円となっています。企業向けにはボリュームディスカウントもありますが、規模によってはライセンス料が数億円に及ぶところもあります。OpenOffice.org に移行すると、このコストから解放されるのです。

●OpenDocument 対応

「OpenDocument」というオフィスアプリケーションの標準ファイルフォーマットがあります。米国マサチューセッツ州で採用されて話題となり、中立性を重視する他の州や英国など各国の公的機関での採用が増え始めています。

この標準フォーマットのベースとなったのが OpenOffice.org でした。OpenOffice.org で使われていたファイル形式を拡張し、標準化団体の OASIS（構造化情報標準促進協会）が標準化したものが OpenDocument なのです。

その後、Microsoft Office も 2007 になって OpenDocument への対応アドインを出荷しはじめましたが、国際的な標準ファイルフォーマット対応ソフトとして先行した OpenOffice.org は、ベンダーに偏らない中立性でも注目されています。

●操作性の維持

Microsoft Office 2007 では、ツールバーに代わるリボンと呼ばれる新しいインターフェースが採用されました。初期の Office から Microsoft Office 2003 まで続いてきたツールバーのメニュー構造が大きく変更されたのです。従来のツールバーの操作に慣れ親しんだ既存ユーザーからは、目的の機能が探しづらいと評判がよくありません。これが、いまだに多くのユーザーが Microsoft Office 2003 のままバージョンアップしていない大きな理由といわれています。

ところが、パソコン出荷時に初期インストールされる Microsoft Office（OEM 版）はすでに 2007 になっています。2003 の出荷は 2007 年 6 月に終了しています。また、2010 年に販売される Microsoft Office 2010 にもリボンのインターフェースが引き継がれることになっています。つまり、慣れ親しんだ操作でオフィスソフトを使い続けようとすれば、Open Office をはじめとする互換ソフト以外の選択肢はありません。

●ソフトウェアの全社統一

Microsoft Office が対応している OS は Windows と MacOS だけですが、OpenOffice.org は Windows、MacOS 、Linux、FreeBSD、Solaris に対応しています。特殊な OS を使用しているエンジニアも含め、全社でオフィスソフトを統一できる利点があります。

バージョンの統一も可能となります。Microsoft Office では導入時期やバージョンアップ費用の関係で、2000 や 2003 などが混在して利用されていることもあります。しかし、OpenOffice.org であれば費用を気にすることなく同じバージョンで統一できます。

●多言語対応

OpenOffice 3.0 では、日本語や英語はもとより、中国語、韓国語を含めて 100 言語以上に対応しています。対応言語はさらに増え続けています。

OpenOffice.org はもともと多国語に対応することを前提に設計されています。言語ごとに専用版ソフトを用意する必要はなく、多言語文書作成に不便を感じることも少ないでしょう。

そのほかの魅力としては、Office 2007 では標準装備とはなったものの、OpenOffice.org はそれ以前から対応している独自機能があります。現在ではアドインとして、OpenOffice.org で開くと元文書が編集できるハイブリッド PDF、OpenOffice.org の Draw では、高価な Acrobat Pro でしか作れなかったフォーム付きの PDF が作れるなど、さまざまな独自機能が強化されています。

■ 互換性の検証

気になる互換性を検証してみましょう。ここでは、メインとなる「OpenOffice Writer」「OpenOffice Calc」「OpenOffice Impress」を確認してみます。

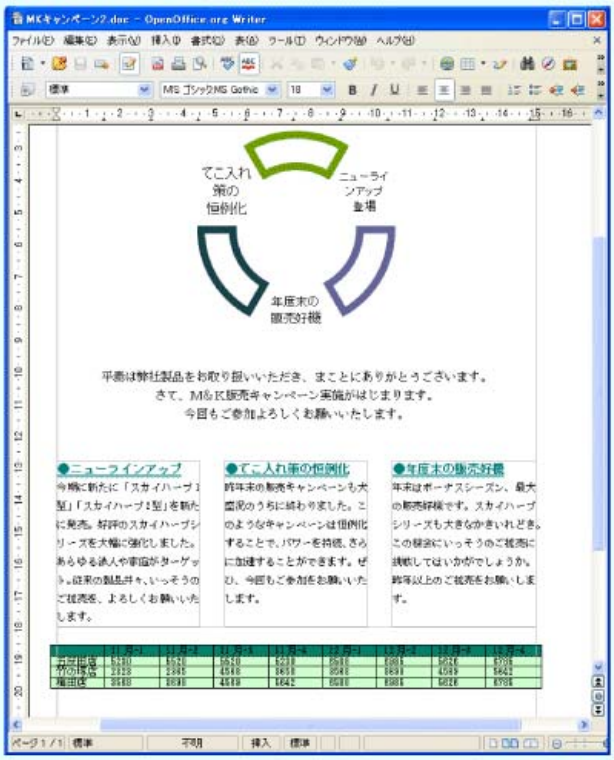
なお、最新のソフトウェアはOpenOffice.orgのホームページや窓の杜からダウンロードできます。

●OpenOffice.org Writer

互換ソフトウェアだけあって、見た目は Microsoft Word とよく似ています。メニューバーの構成は Word 2003 とほぼ同じですから、Word 95 や 2000 など古くから使い続けているユーザーには、Word 2007 よりも OpenOffice Writer の操作の方がなじみやすいかもしれません。日本語の扱いについても、ほとんど同じ操作が可能です。文章や段落の書式をまとめるスタイル機能は、ページやフレームにまでスタイルを指定できる Writer の方が充実しています。

ただし、一部に Writer ではできない機能や Word と異なる仕様があります。たとえば、アウトラインプロセッサの機能や操作性は Word に及ばなかったり、罫線や表機能では点線や破線など一部の線種を使用することができない（図 3-1、図 3-2）、文法チェッカーは標準ではインストールされていなかったりします。しかし、これらは別の機能で実現したり、拡張機能をインストールしたりすることで、Word と変わらない機能や文章表現、レイアウトが可能です。

【図3-1】Microsoft Word 2003で作成した文書



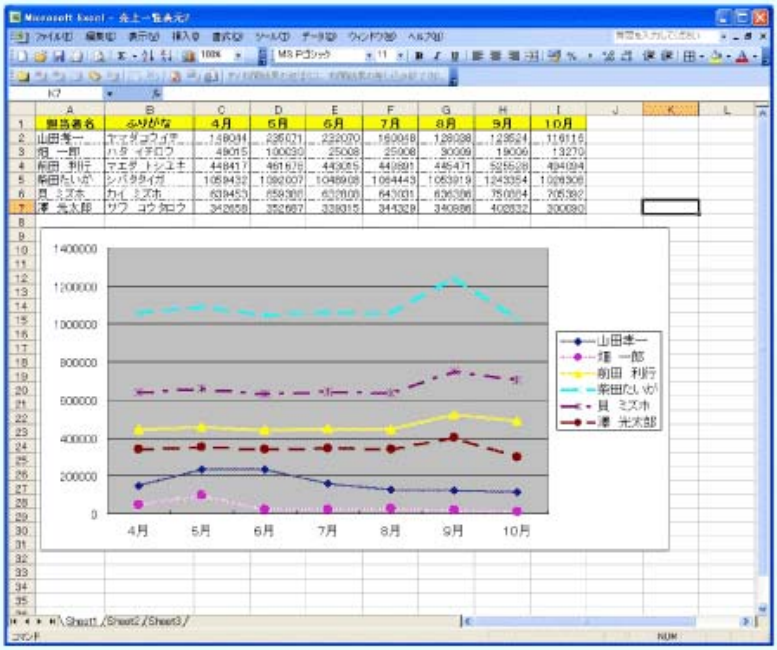
【図3-2】OpenOffice.org Writerで読み込んだWord文書
⇒ほぼ完全にレイアウトが再現されるが、図形の罫線、表の形と罫線が違う

●OpenOffice.org Calc

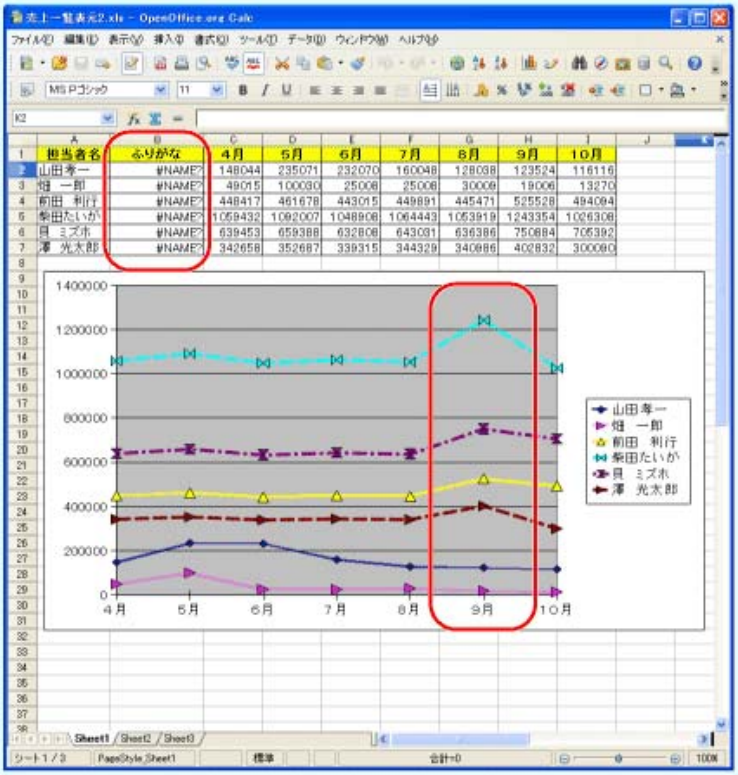
インターフェースはExcel とほぼ同じなので、違和感なく操作することができるでしょう。しかも、Calc のシートは大きく、Excel 2003 の 256 列×65,536 行を上回る 1,024 列×65,336 行、1 年 365 日を列方向に表示するに十分です。その後 Excel2007 も 16,384 列×1,048,576 行と巨大化しています。

関数もほとんどが Excel 同様に利用できます。ただし、引数の指定に「,（ピリオド）」ではなく「;（セミコロン）」を使用する点が異なります。「ASC（全角を半角に変換）」「JIS（半角を全角に変換）」「PHONETIC（ふりがなを表示）」「DATEDIF（期間の長さを求める）」などの一部の関数は Calc にはありません（図 4-1）（図 4-2）。しかし、こうした関数の多くに、エクステンション（拡張機能）や同等の関数が用意されており、日常の使用に困ることはないでしょう。

また、Excel のマクロ機能はそのまま利用することができませんが、最新版では VBA（Visual Basic for Applications）互換モードが実装され、一部の機能は VBA の記述のままで動作するように改良されてきています。



【図4-1】Microsoft Office Excel 2003で作成したシート

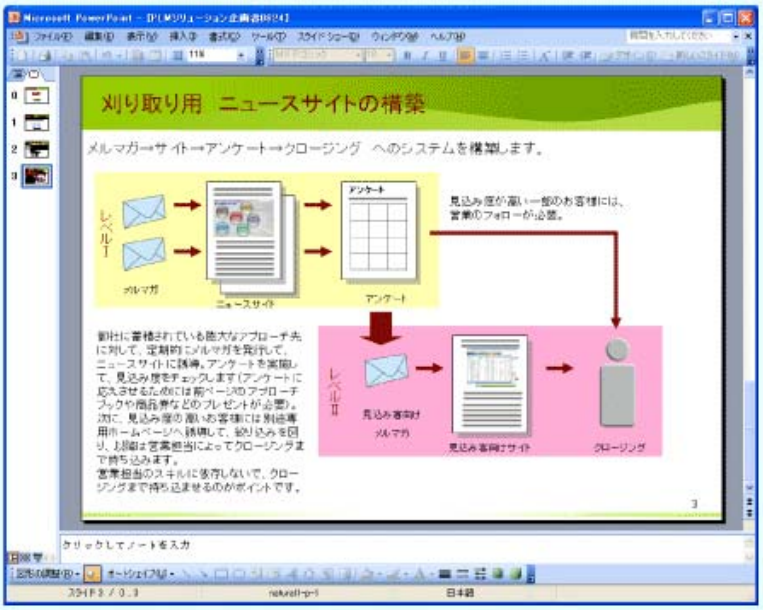


【図4-2】OpenOffice.org Calcで読み込んだExcelシート
⇒レイアウトは問題なく再現されるが、PHONETIC関数は機能していない
表の罫線やグラフのマーカーの形状も異なっている

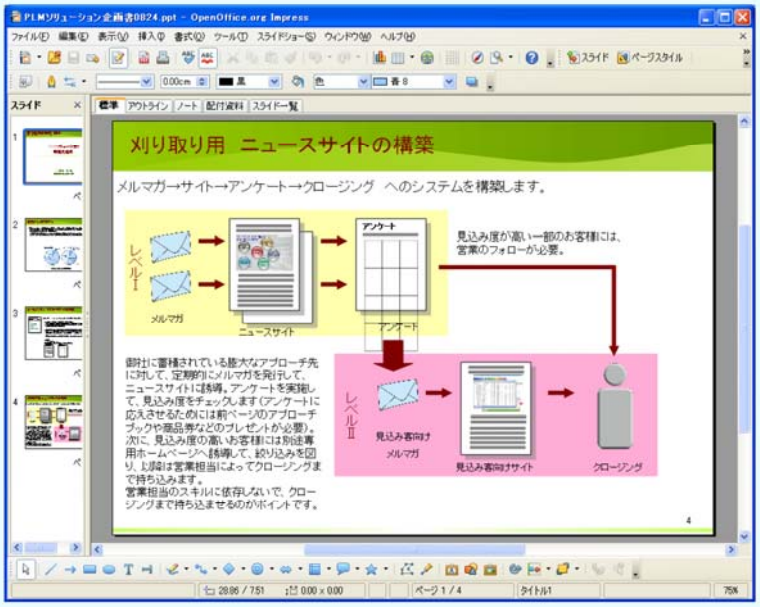
●OpenOffice.org Impress

プレゼンテーションにおいても PowerPoint の代替えとして使用することができます。注意すべきは、日本語処理に難点があることと、Calc の取り込みなど表組に図５のような現象があることです。

しかし、PowerPoint を凌駕するような図形機能も用意されており、また、PowerPoint 用のテンプレートはほとんどそのまま利用可能なので、ネット上に数多く公開されているテンプレートをダウンロードして使うことができ、手軽にプレゼンテーションを行うのに十分、役に立つものとなっています。



【図5-1】Microsoft Office PowerPoint 2003で作成したシート



【図5-2】OpenOffice.org Impressで読み込んだPowerPointシート
⇒表組に乱れがある

■ OpenOffice.org以外の互換ソフト

OpenOffice.org 以外の互換ソフトとして、Kingsoft Office 2010 と StarSuite について少し触れておきます。両者ともに、有料ソフトウェア製品です。

●Kingsoft Office 2010

ツールバーを使用した 2003 と同じ操作性と互換性を持つ Kingsoft Office 2010 は、Excel、Word、PowerPoint に相当するソフトウェアで構成され、互換性の高さで定評があります。

有料のソフトウェア製品として、サポートもしっかりしています。30 日間の試用も可能です。

●StarSuite（StarOffice）

OpenOffice.orgの母体となったソフトウェアであり、現在バージョン 8 になっています（アジア圏以外では「StarOffice」、商標の関係でアジア圏では「StarSuite」の名称で販売）。こちらも有料のソフトウェアで、サポートが提供され、90 日間の評価版が用意されています。開発元のサン・マイクロシステムズは「Microsoft Office 2003 Standard Editionと比較して 75%以下の価格」で購入できると発表しています。

■ OpenOffice.org移行への現実性

OpenOffice.org への移行にあたって注意しなければならないのは完全互換ではないということです。社外と頻繁にドキュメントのやり取りがある場合は、互換性がネックになる危険性があります。また、サポートもありませんから、運用担当者の負荷は増加することになるでしょう。その手間と費やす時間は覚悟しなければなりません。

しかし、OpenOffice.org は Microsoft Office に代わる価値はあります。無償というのは大きな魅力です。既存のドキュメント資産が継承できます。また、ユーザーにとって、ビジネスツールとして使うオフィスソフトは「指先が覚えている」操作性が無視できません。慣れ親しんだインターフェースが維持されている点も見逃せません。日常使用する重要なビジネスツールが 1 社独占状態にあることを不安視する向きもあります。

以上のような事情から、OpenOffice.org をはじめとする Office 互換ソフトのユーザーは世界規模で拡大しており、企業や官公庁などの利用も多くなっています。Word や Excel、PowerPoint のデータが利用できさえすれば、高価な Office 製品にこだわらない。革新的なインターフェースよりもどちらかと言えば使い慣れた操作性を優先したいと考える人が増えているようです。

スペック至上主義から使い勝手やローコスト優先へ、OpenOffice.org の台頭はコンピュータソフト全体の大きな変化のあらわれなのかもしれません。

参考サイト：

・OpenOffice.org日本語プロジェクト

・OpenOffice.org 2.0 はMicrosoft Office代替えにふさわしいか